
室温35℃の恋

パピコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

室温35℃の恋

【Nコード】

N2363N

【作者名】

パピコ

【あらすじ】

【注意】冗談から生まれた息抜きのお遊び文章です。物事を真面目に受け取りすぎる方には互いのためにお勧めしません。【注意】朝宮ミキは、仮面ライダーとして孤独に戦う女子高生。仮面ライダーと怪人を軍事兵器に転用しようと付け狙う組織に所属するタカシと、互いの正体を知らないままに惹かれ合って……。 「ライダーで恋空やったらどうなの？」から生まれた新感覚ノベル。

1ープロローグ

ねえ、タカシ……。

今も、覚えてるよ。

あなたは、私にとって光だった。

眩しくて、眩しすぎて、掴めない光。

夜が来れば光が消えて暗くなるみたいに、タカシはいなくなっちゃったけど。

必ず朝が来るんだって、教えてくれたのも、タカシだったよね。

あなたを好きになって、辛いこと一杯あった。悲しいこと、一杯あった。

でも、今なら心から言えるよ。あなたを好きになって、心から愛せて、良かったって。

神様に、感謝してるよ。

だから、あたし、忘れない。絶対忘れない。

戦ってるあたしの心には、いつだってタカシがいるよ……。

2ーあたしはライダー

あたしの名前は朝宮ミキ。都内のそこその高校に通う、普通の女子高生。

特別かわいってわけでもないし、頭がいいとか、スポーツが出来るとか、そんなこともない。

ちょっと遊び好きな、でも、どこにでもいる平凡な女の子。

今は、授業がかつたるくなつて、友達と抜けだしてきて、渋谷をぶらぶらしてたところ。

だってさ、天気がよくて、空が広くて青くて綺麗なのに、数学なんてバカバカしくない？

渋谷の街は人でいっぱい、今は昼時だし、お巡りさんに補導されるなんてこともないから、とっても気分がいい。

友達のマイと、新しい服が欲しいけどお金がないね、とか、そんな話をしてたんだ。

だけどあたし、一つだけ、普通の子と違う所があるんだ。だから、こういう楽しい時間も、そんなに長続きしない。

鞆の中の携帯電話がけたたましく着うたを鳴らした。すぐに分かるように、あたしの大嫌いな歌にしている。

その曲が鳴ると、あたしはイヤな顔を、したくなくともしてしまふ。

「はい、もしもし。はい、はい。分かりました。はい。場所は……、分かりました、行きます」

電話を切ると、あたしは立てた手を口にあてて、マイに、ごめーん、と言った。

「ごめんね、急用なんだ。この埋め合わせは今度するからさ」

「いいよ、あんたの急用はいつもの事だもん。あたしはカッコいい人でも探すわ。いつてらっしゃい」

我が友ながら、さばさばした性格で、マイは本当にいい子だ。

手を振って駆け出して、あたしは路地裏へと駆け込んだ。

場所はすぐ近くだ。ここからなら、あれになって走っていった方がきつと早い。

普通の子が持つてるより大きな鞆から、ごついベルトを取り出すと腰に巻いて、スイッチを押した。

「変身！」

そうするとあたしの体は光に包まれて、『仮面ライダーバイブ』に一瞬で変身する。

白い全身スーツでダサイし、プロテクターみたいのがゴツくてイヤなんだけど、やらなきゃいけないんだよね。

これは、あたしの大好きなおじいちゃんがあたしの為に残してくれたもの。あたしにしか使えないんだ。

この事は、パパにもママにも内緒。

おじいちゃんの助手だった人が、あいつらの居所を、さつきみたく教えてくれる。

そしたら、あたしは戦わなきゃいけない。そうしないとあいつらは、どんどん人を殺していつちやうから。

しばらく走ると、ビルの壁が壊されて、車が横に転がって黒い煙をあげていた。

緑色の、虫みたいなイヤーな光沢を持ってる、怪物がそこにいた。

こいつは、「ストレンジャー」っておじいちゃんが呼んでた。

別の世界から、地球を侵略に来たんだって、おじいちゃんが言っていた。

それが本当かは分からないけど、ストレンジャーは時々現れて、街の人をどんどん殺した。

昔それで大騒ぎになって、自衛隊が出動した事もあったけど、自衛隊の人達も沢山やられた。

でも、あたしなら、あいつらと戦える。

あたしはストレンジジャーに向かって走って行って、パンチを繰り出した。

続け様に何発か当てて、キックを浴びせると、ストレンジジャーはよろける。

ボカッ！　ズササーッ！

調子に乗ってまたパンチを当てようとすると、反撃にあって、ストレンジジャーが振り上げた腕が脇腹に当たって、あたしは後ろに吹っ飛んだ。

アスファルトの上を滑って、ようやく止まった。

体を起こそうとしたら、頭の上を飛び越えてひどい音がした。

ズガガガガガッ！

マシンガンの銃弾が、ストレンジジャーに次々に当たった。

ストレンジジャーはよろけたけれども、あまり効いてない。

後ろを向くと、三四人の防弾チョッキをつけた男たちが、必死にマシンガンでストレンジジャーを撃ってた。

構わない、どうせリバイブにも、マシンガンの弾なんて効かないんだから。

ストレンジャーの動きを止めてくれてるから、かえって助かるかも。

あたしはベルトの脇のスイッチを押した。

『revive rider kick』

これが、ライダーの力を呼び起こす儀式。電子音声が鳴って、あたしの右足に、力が集まっていく。

「たあああーっ！」

マシンガンの弾なんか構わずにジャンプして、飛び蹴りを当てると、蹴りが当たったストレンジャーは後ろに数歩よろけた後に、ばたりと倒れた。

ドゴオオオオオン!!!!!!!!!!!!

小さく爆発が起きて、ストレンジャーが消えた。

それを見届けると、あたしは走り出した。

あの軍人たちに捕まったら面倒くさいからだ。

あいつらが何者なのかは分からないけど、あたしとストレンジャー、両方を捕まえようとしてるみたいだった。

あたしの活躍は、夕方のニュースで小さく流れた。

いつまで正体バレないでやっていけるのかな。それが今一番の悩み。

3 白い雲みたいに

そんなこんなで、あたしはストレンジャーと戦いながら、それなりに楽しく高校生活を送ってたんだ。

もちろん、嫌なこととか辛いこともあるよ？

殴ったりキックしたりなんて、本当はしたくないよ？

でもあたし、これはあたしにしかできないんだ、って思ったら、そんなに嫌でもないかなって思ってたんだ。

パパとママは小さい頃からずっと仲が悪くって、あたし、いらねえ子だったし。

パパは、「お前がちゃんと育てないからだ」って言うし、ママは、「あなたは私にばかり責任を押し付けて」ってヒステリー。

言っちゃなんだけど、あたしそんな悪い事なんかしてないよ。

そりゃ、時々かったるくなってサボったりするけど、勉強だってちゃんとしてるよ。

あたしは自分ちのそんな空気が嫌で、学校にいない時は、近くのおじいちゃんの家に入り浸ってた。

詳しくは分かんないけど、おじいちゃんは、科学者ってやつだった。自分の家を研究所にしてて、助手の佐々木さんがいつもいた。

佐々木さんは、メガネをかけた無愛想なおじさん。でも悪い人じゃない。

その時はあたしは、おじいちゃんは何の研究をしてて、何を作ってるかなんて、何も知らなかったんだ。

ただ、おじいちゃんは優しくかったし、佐々木さんはちょっと口うるさいけど勉強を教えてくれたから、家にいるより居心地が良かった。

おじいちゃんは、三年前に病気で亡くなった。おじいちゃんの家は取り壊される事になった。

取り壊しの日に、おじいちゃんの家の前で、佐々木さんが、大きな鞆をあたしに渡したんだ。

「君は今日から、これを使って戦わなくちゃいけない」

佐々木さんがあんまり真面目な顔で言うから、あたしはおかしくなっ
って、笑っちゃった。

何を言ってるんだか分からなかったんだもの。

ストレンジャーの事は、沢山ニュースにもなってたから、もちろん

知ってたけど。

まさか、そんなのと戦えって言われるなんて、思わないじゃない？
だからあたし、何言ってるんだか分かんないって、笑った。

でもあたしはこうして、戦ってる。

おじいちゃんのためでもあるし、あたし自身のためでもある。

だって、何もできないで、あいつらに誰かが殺されるのを見てるなんて、イヤじゃない。

何とかできるんだったら、できるだけでも何とかしたいじゃない。

ただそれだけだったんだ。

「ないーっ！　　ない、ないっ！」

あたしが必死に鞆の中をまさぐっていると、それに気づいたマイが呆れたような顔をして、あたしを見た。

「あんたまた何か無くしたの？」

「ケータイが、ケータイがないのっ!」

「あちゃあ、そりゃ大変だわ。鳴らす?」

「うん、お願い!」

マイが携帯から電話をかけるが、音量が大きめに設定してある筈なのに、あたしの携帯電話の着メロは一向に聞こえてこなかった。

「うーん……どっかで落としたのかもねえ。あんたのってGPSついてたっけ?」

「ううん、ついてない。ついてる奴高かったんだもん、買ってもらえないよ」

「そりゃそっか」

がつくりと肩を落とすと、マイはまた呆れた顔であたしを見て、溜息をついた。

「ついに携帯まで落としちゃうとはねえ……っと、誰だろ」

突然、マイの携帯が鳴り始めた。

「あれ、これあんたの番号じゃない。ちょっと出てみるね」

「うん、お願い」

あたしが頷くと、マイは通話ボタンを押して、携帯を耳に当てた。

「はいもしもし、はい、……うん、そうです。そう。あ、そうなの、拾ってくれたんだ」

マイの言葉の内容を聞いて、あたしはほっと息をついた。マイも喋りながらにっこり笑って、こっちを見た。

「はい、そうだね、本人に代わるね」

言うときマイは携帯を耳から外して、あたしに差し出した。それを受け取って、耳に当てる。

「もしもし」

「あの、もしもし、この電話の持ち主の人？」

若い男の人の声だった。やや高い声だった。

「はい、そうです。拾ってくれたの？」

「うん、渋谷の駅の近くで。植え込みに落ちてた」

何で植え込みになんて落ちていたんだろう？ 全然覚えはなかった。

「あの、ありがとう。返してほしいんだけど」

「うん、そうだよね。どうしよう、直接返す？ それとも警察かシヨップに預かってもらう？」

言われてあたしは、少し考え込んだ。

プランの変更とかでもそうだけど、警察とかショップで受け取る時には、多分本人確認ってやつが必要だ。

あたしのケータイはママ名義だから、委任状とか何とかがないと、あたし一人では受け取れない。ママとはそんな話、したくない。

「えっと、直接受け取りたいんだけど、今日何時だったら大丈夫？」

「俺？ 今日は何時でも大丈夫だよ」

「そっか。あたし学校なんです、終わって……五時に渋谷駅でどう？」

「大丈夫だよ。ベタだけどハチ公前でいい？ 何か目印いるかな」

「じゃああたし、うちわ持って待ってる。えっとね、青くって星が描いてあるやつ」

「オッケー、分かった。じゃ、五時に」

「また」

言って、携帯を切ってマイに返した。

「ありがと。返してもらえる事になった」

「良かったね。あたしも付き合うよ」

「え、大丈夫だよ？ 別に一人で」

「何か軽そうな声の男だったじゃん。あたしはミキが心配なの。あんた絶対騙されやすいんだから」

そんな事ないもん、と反論したけど、マイにはいいからいいから、と流されてしまった。

正直言うと、一人だちょっと心細かったから、頼もしいけど。

持つべきものは親友だね。

渋谷に着いたのは、四時半を少し過ぎた位だった。

夏だからまだまだ太陽が出ていて、もう夕方なのに、あたりは昼みたいに明るい。

とりあえず缶ジュースを買って、あたしとマイはハチ公の銅像に背中を凭れさせた。

忘れない内に鞆からうちわを取り出す。学校には冷房はあるけど、席によっては寒かったり暑かったりするから、ブランケットとかうちわは用意しておくに越したことはない。

涼し気な服装の男女が行き交う。

「あれ暑くない？　ちょっと色の合わせ方もイマイチ？」

「あつ、あのスカートかわいい、どこで売ってるんだろ」

あたしとマイは、通りすぎる女性の服装を勝手に批評しながら時間を潰した。

程なく、あたしとマイの前に、一人の男の人が立ち止まった。

この暑いのに彼は濃紺のスーツを着込んでいて、あたしが手に持って自分を仰いでいたうちわをじっと見ていた。

「君、このケータイ落とした人？」

ポケットから無造作にあたしのケータイを取り出して、その人ばかりと笑った。

夏の空、白い雲が海と空との境目を作ってるみたいな、そんな、くつきりはつきりとして、気持ちのいい笑い方だった。

「うん、そう……ありがとう」

何となくぎこちなく頷いて、あたしはケータイを受け取った。

4 一極めて平凡なきっかけ

あたしたちは、近くのマックに入った。

何かお礼しなかったんだけど、高校生でバイトもしてないから、そんな高いお礼は無理だったから。

お礼したいって言ったら、その人はいいいよって何度も言ったけど、あたしだって引かなかった。

横のマイが妥協案として、近くのマックを指さした。

四人がけのテーブル席に、あたしとマイが隣り合わせで、あたしの向かいにその人が座った。

自己紹介は簡単に済ませてあって、彼は長嶺タカシっていう名前で、二十二歳。

トレイに載ったコーラが三つ。それぞれに一つずつ配って、あたしたちはそれぞれに、ストローからコーラをすすった。

「それにしてもミキ、何でケータイが植え込みの中に落ちてんの？ 酔って暴れた？」

「酔わないよ、飲んでないんだから」

マイのツツコミに、あたしは少しどきりとした。

本当はお酒を飲んでたって意味じゃない。

あたしは確かに昨日、この辺りで大立ち回りをしたのだ。

「ま、携帯も壊れてないみたいだし良かった。なくさないようにね」

「あ、はい」

タカシさんは、気さくに笑った。

マイの言うとおり、喋り方はちよつと軽い感じもしたけれども、屈託がないっていうか、明るい笑い方をする人だった。

「あ、そうだ、それってChaliceの？」

タカシさんが指さしたのは、あたしの携帯のストラップだった。

このストラップは、Chaliceというインディーズバンドのライブ会場でしか売られてない。

バンドロゴは入ってない。ゴールドのハートが二つ、片方に矢が刺さってる。バンドのシンボルマーク。

どこにでもあるといえばある、そんなデザインだから、これ見てChaliceの名前が出てくるなら、相当ディープなファンだ。

「もしかして、Chalice好き？」

「好き好き、大好き。ライブなかなか行けないんだけどさ。あー、一昨日もやってたんだよな」

「えっ、あたし行ったよ、新曲出てた！」

「マジか！　くっそー、仕事がなかったらなあ」

タカシさんがあんまり悔しそうなので、何だかおかしくなって笑ってしまった。

「じゃあさ、一昨日買った新譜のCD貸してあげる。あたしもうプレイヤーに落としてあるから」

「えっ、マジ？　いいの？」

明らかにタカシさんの目がきらきらと輝いた。そこまで好きなんだ、とちょっとびっくりもしたけど、やっぱりおかしくて笑ってしまう。

「いいよいいよ。今度一緒にライブ行って、その時返してもらえばいいっしょ？」

「うわぁ……なんか、嬉しいなあ。Chaliceの話出来る奴なんて周りにいないもんなあ……」

鞆から取り出したCDを差し出すと、押し戴くようにして仰々しく受け取って、タカシさんはCDを眺めて、ものすごくいい笑顔を見せた。

「ちょっと……あんた、迂闊すぎない？」

マックを出てタカシさんと別れた後しばらくして、マイが口を開いた。

言われるだろうなあ、とは思ってた。

結局あの後、二週間後に別のハコでやるライブに一緒に行く事になって、アドレスとか交換した。

「そっかな。だってさ、Chalice好きなんてそうそういないんだよ？ 貴重な仲間なんだから」

「そこら辺の所はあたしはよく分かんないけどさ……あんまり軽々しく着いて行ったりするんじゃないよ？」

「しないって。マイは心配性なんだから」

マイは授業はよくサボるけど、恋愛方面では結構真面目な考え方の子だった。お母さんみたく、口うるさい時もある。

お母さんみたく、ってのはちょっと違うのかな。うちのママは、あたしにそんな注意はしない。

残業ばかりで家にいないから、あんまり顔も合わせない。

あたしには興味も関心もあまりない、面倒をかけられたくない。ママはそういう人だ。

あたしはマイと似たような考えだし、マイにあんまり心配かけたくないから、他の子が行ってるみたいないな集まりにはあんまり顔を出さない。

カッコいい男の子がいるよって誘われるけど、今のあたしは、正直それどころじゃない。

それどころじゃないのは、タカシさんについてだって同じだ。

だから、マイが心配してるような事なんて、何も起こらない。

あんまり代わり映えのしない日々、平凡な日常。

学校じゃないもう一つの日常も、それなりに流れる。

平凡じゃないのかもしれないけど、あたしにはもう、当たり前になっちゃった。

ただ、その日は、ちょっと様子が違った。

ストレンジャーと戦ってるあたしを取り囲んだ兵隊の数が、いつもの三倍くらいいたのだ。

状況が良くならないから、対策を立ててきたんだろう。今までそうしなかったのが不思議な位だ。

ストレンジャーのパンチを躲しつつ、大振りのハンドガンみたいな

ものから撃たれた弾を叩き落とした。

その弾は、変な形をしてた。弾の先端に、針みたいなのが付いてる。いつもはマシンガンみたいな大きな銃を担いでるのに、今日はハンドガン。その理由が分かった。

これ、多分、麻酔弾だ。

『組織』も、あたしとストレンジャーを捕まえるのに、やっと本気を出して色々仕掛けてきてるって事なのかもしれない。

でもそんな針は、ストレンジャーの硬い皮膚を射抜けない。

ストレンジャーに向かって放たれた弾は、尽く弾かれて地面に転じた。

これはもしかしたら、次はガスでも来るんじゃない。このスーツがどこまで耐性があるか分かんないから、佐々木さんに質問しとかなきゃいけない。

ガスで眠らされて捕まるなんて、ぞつとしない想像だ。捕まったら何されるかも分かんないし。

これはベルトの力であたしはただの人間だけど、そんな事、この人達は説明したって分かってくれないだろう。

さっさと終わらせて、さっさと逃げよう。決めて、ベルトにあるボタンを操作した。

『r e v i v e r i d e r p u n c h』

ベルトから声が出て、ストレンジャーは駆けこんでくる。

ドゴッ！！！！

カウンター気味にあたしの右のパンチが当たって、ストレンジャーの動きが止まった。

最後は見届けないで、そのまま後ろを向いて駆け出した。後ろで爆発が起こった音がした。

爆風に怯んで兵隊さんたちの動きが止まる。

助走をつけて、一気に飛び上がった。リバイブの力があつたら、人間を飛び越えるなんて、簡単だ。

「待てっ！」

兵隊さんの一人が叫んだ。その声に聞き覚えがある気がしたけど、あたしは止まらないでそのまま、走り続けていった。

5ーガンメタセダンって若者の乗る車じゃないよね

心配するような事なんか、何にもなかったんだ。

タカシは、初めて会った時はカッコリしたスーツなんか着て、何だかちぐはぐで妙な感じがしたけど、何て事ない、普通の男の子だった。

ライブは二人で行って、すごく盛り上がった。ライブ自体も好きな曲揃いのセトリリストで、あたしとしてはここ最近で一番満足したし、マイナーなバンドだから、お互いに他に話せる相手がなくて、話が尽きなかった。

何にもなかったんだよ。二人で駅の改札前で、終電ギリギリまで語ってた。若い男女二人のとり行動じゃないよね、我ながら思う。

でもその時のあたしは、好きなバンドの好きな曲とか、メンバーの事とか、そんな事を際限もなく喋り続けるのにすっかり夢中だった。

また行こうねって約束して、メアドも交換した。

タカシは、どうでもいいメールを、たくさん送ってくる。例えば『遅刻しそう!』とかさ。

メール打ってる間に急げって(笑)って返信したら、『あっそうか』とか返ってくるの。どっか抜けてるんだ。

『今日の晩飯もカップラーメン』なんて、しょんぼりした絵文字付きで写メしてくるから、『今度作ってあげるよ、高いけど』って返

したのね。

したら、『楽しみにしてる！俺ハンバーグ好きだから！』だって高いって言ってるのに完全スルーだよ。いっそカップラーメン作ってやろうか。

全然普通だよ。あたしなんか、普通の子にして普通じゃないのに、タカシはほんとに、普通の子なんだ。

あたし、ちょっと怖かったんだ。普通じゃない、普通じゃないのが当たり前になっちゃった自分。

でも、他の子とは違うんだ、っていうの、どこかで自慢みたく思っ
て、何にも知らないくせにして、バカにしてたみたいな所もあるんだ。

友達をあんまり作らないのも、あんまり彼氏とか欲しいと思わないのも、たぶんそのせい。

あたし人を下に見てるから、誰も好きになれないんだ、きっと。

自分イヤな子だなんて思った。それでもまだどっかで、あたしはあんたたちと違う、って思い続けてて消せない。

タカシにそんな気持ち湧かなかったのは、年上で、初めて会った時スーツだったからなんだろうなと思う。

年上でスーツの男の人、そんな知り合いは学校の先生か佐々木さんぐらいで、佐々木さんはお父さんぐらいの歳だったし、普段喋ってても難しい事ばかり言って、正直同じ日本の同じ時を生きてる人

なんだろうかって、不思議になる事もあるぐらいだから、タカシとかとは比較できない。

タカシも、変わってるっていえば、やっぱり変わってるのかもしれない。

仕事は何してるのか何回か聞いたけど、教えてくれなかった。愛と勇気だけを友とする仕事だよ、とかバカな事言うから、お前はア●パ●マンか！　ってツツこむしかない。

次のライブまだかなって、前よりも待ち遠しく思ってる。

子供みたいにはしゃいで、好きな曲のギターリフとかベースラインの事語って、専門用語がちんぷんかんぷんなあたしに、一から（分かりやすくはなかったけど）教えてくれた時の楽しそうな顔とか、また見たいと思った。

一方その頃。

『組織』が、あたしを捕まえようとする手口は、日に日に過激に巧妙にエスカレートしていった。

いつの間にか探知機付けられて、変な電波が出てるのに気付いた佐々木さんから連絡されて、おはじき位の小さなそれを捜し出して踏み潰して壊したり。

ストレンジャーごとバズーカで狙い撃たれて、爆発しないから何だ

ろうって思ったら催眠ガスが吹き出してストレンジャーがぼったり倒れて寝たり。

ガスについては、佐々木さんに対策強化をお願いしてたのが幸いして、すぐに離脱すると影響は受けなかった。

ストレンジャーを倒した後に待ち伏せされてるのはここ最近の通例みたいなものになってしまった。

あたしはストレンジャーから人間を守ればそれでいいのに、何で同じ人間から追いかけてまわされなきゃいけないんだろう。

正直なところ、疲れてきた。

残念ながら『組織』の兵器は、ストレンジャーにはあんまり効果がない。そもそも兵器を使ってるのが（訓練とかはもちろんしてるんだろうけど）普通の人間だから、たくさんでストレンジャーを囲んだって、腕の一振りですぐに三人は簡単に薙ぎ倒されて動かなくなる。

ライダーの力が、あたしの力がどうしても必要なんだ。あたしじゃなきゃ、守れないんだ。

そうは思うし、それはあたしの誇りでよりどころだったけど、やっぱり、少し疲れてきてたのかもしれない。

時々、『組織』の兵隊さんの中から聞いた事あるような声がしたけど、疲れてるから気のせいだって、思ってた。

タカシからまたメールが来た。山手線の中であたしは、またどうでもいい話なんだろうなとわくわくして、携帯を開いた。

『今日ヒマだから、遊ばない?』

珍しい内容だった。あたしは(ストレンジャーが出なきゃ)用事なんてないし、家にもいたくない。

すぐに、いいよ、と返事を返すと、現在地を聞くメールが返ってきた。

高田馬場の手前と返したら、車で迎えに行くから新宿で降りてくれ、って返ってくる。

車を持ってるなんて知らなかった。言われた通りに新宿で降りて、伊勢丹の前で待っていると、ガンメタリックのセダンが路肩に止まった。

「よっ」

顔を出したのはタカシだった。何てオッサン臭い車に乗っているんだろう。呆れてしばらく、車とタカシを交互に眺めてしまう。

「ん、どした? 早く乗って?」

「何でこんな渋い車乗ってんの……?」

戸惑って質問すると、タカシは少し困った様子で、照れ臭そうに笑った。

「んー、これさ、親父の形見つつうの？　これ見ると思い出すから、何か処分できなくなってるさ」

形見。なるほど、それならピカピカにして大事そうに乗ってる理由も分かる。っていうか、お父さんが亡くなってたなんて知らなかった。

ごめん、と謝りながら助手席に乗り込むと、タカシはぽかんと不思議そうな顔をした。

「……えっ、何が？」

「……ううん、やっぱいいわ。それよりどこ行くの？」

「どこか行きたい所ある？　海とかさ」

「海にドライブとか、何か恋人みたくない」

「いいじゃん、恋人みたいで、ほんとに恋人になっちゃえばさ」

あたしはびっくりしてタカシを見た。タカシは至極真面目な顔つきで、実にまっすぐにあたしの事を見ていた。照れ臭くなって、思わず目を逸らした。

「俺達、付き合わない？」

続いた言葉にあたしはまたびっくりして、もう一度タカシを見たけど、タカシの顔つきはさっきから一ミリも変わってなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2363n/>

室温35℃の恋

2011年1月13日16時33分発行